

者のトップの下に若い人材一職だから名刺ないんだ」と一そ、国内ではパソコンニク々

介護分野で働く人、これ

【本記3面】

養護老人ホームやデイサービスを手掛ける「聖母の丘」(熊本市西区)に避難者が続々と詰め掛けている。坂上さんは阪神大震災当時、神戸市東灘区の病院で世帯が断水し、生活が困難に。しかし、1995年の阪神大震災を体験した教訓から、施設長の坂上敏子

「けが人の手術や縫合に付き添い、水のありがた

見えない出口

熊本地震

-4-

ん(仮名)が井戸を掘削し、水を確保していたのだ。緑に囲まれた小高い丘に

上がある。施設が見えてくると、鉄筋コンクリート2階建ての老人ホームは、相次ぐ大きな揺れでもガラス1枚割れなかった。近所などからやってきた約80人が

災害に備え施設に井戸

阪神大震災の教訓生きる

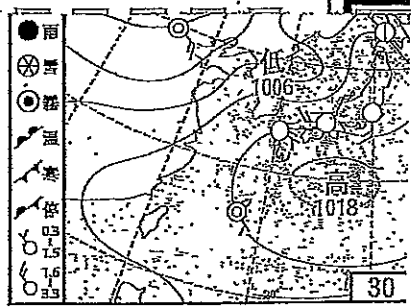
ら1週間を過ぎても、完全には復旧していない。困った近隣の住民たち100人以上が水を求め、行列した日もあった。約50リットルの水を積み込んでいた会社員佐藤正邦さん(61)は「飲料水は支給されるが、生活用水は自ら確保するしかない。本当に助かっている」と喜ぶ。

施設の電気がすぐ回復し、5月に開業予定だった。旧、5月に開業予定だった。施設には食料、日用品は原則として個人で用意してもらった。坂上さんは「避難した。市から福祉避難所」は熊本市に176カ

熊本市南区の田中麻美さん(31)は、介護が必要な認知症の祖父(89)と小学校に避難した。市から福祉避難所の説明はない。「もっと静かな場所があるなら入りたい」。体育館近くの廊下に敷いた布団にしゃがみ込んだ表情には、たまった疲れがにじんでいた。

「終わり」

ングセルモニー。弘前に長



正平調

熊本地震の現状を伝える記事が日々届く。未掲載分も含め読み返していたら、

こんな記事が目につく。しほらく前の報告だ。◆社会福祉法人が運営する施設での話だ。ここは熊本市の福祉避難所にもなっている。取材の時に身を寄せていたのは一般の被災者を含めて約80人にも上った。一つの施設としては異例の多さ、と伝える◆たぐさんの市民をなせ受け入れられたのか。建物が無事だったのに加え、災害用の井戸を掘っていたことが大きいという。断水が続いても困らない。水を求め、近隣住民が長い列をつくったそうだ◆施設長が阪神・淡路大震災の体験者と知って深くうなずく。神戸市内の病院で看護部長だったので、修羅場で「水のありがたみを痛感した」。10年前に今の施設へ異動となつて取り組んだのが、災害に備えた井戸掘りである◆熱くても飲み下せば忘れる。雨が上がれば笠を忘れ、病が癒えれば医師のことなどどこへやら。古来のことわざ通り、とかく人は忘れる。教訓を心に焼き付けようとしてもやがて薄れる。だからこの井戸の話が心に残る◆地震発生から2週間余りになる。21年前の経験に照らせば、心身の疲れがいつそう濃くなつていく頃だ。支援の手を緩めてはならない。そして私たちもいつ襲うかも知れぬ災害への備え、おそむき怠りなく。2016.5.1

2016年(平成28年)

5月15日(日)

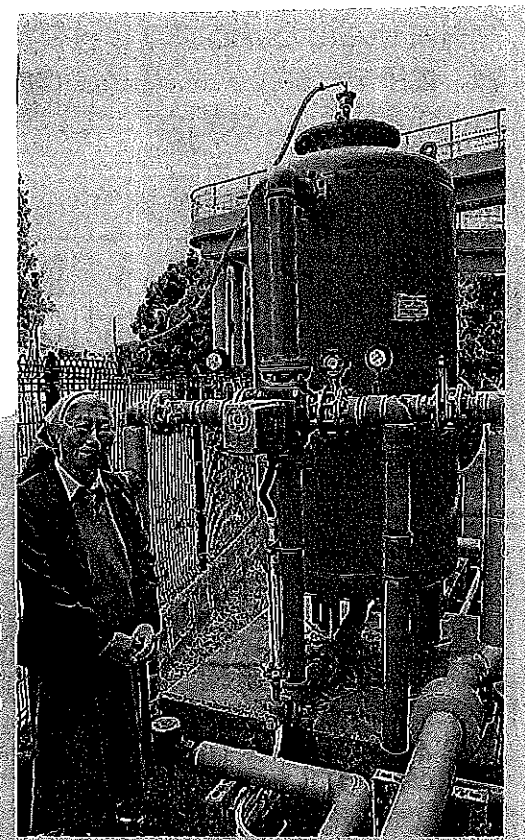
朝日新聞(夕刊)

井戸整備 地域に水提供

井戸は、施設長の笠原洋子さん(70)の発案で4年前に設けたもの。笠原さんは阪神大震災の時、神戸市灘区の病院の看護部長だった。けが人が次々と訪れ、生き埋めで砂まみれの遺体も運ばれた。水道が止まり、手術器具を蒸気で滅菌できず、薬液で消毒。入院患者の衣類などを洗濯できず、食事も満足に用意できなかった。トイレの水は、川の水を7階まで運んだ。

その病院を定年退職し、2006年に聖母の丘へ。「飲み水が支障されてもトイレや風呂の水はとっししようもない。井戸が必要だ」と考え、数年がかりで整備した。工費には約1500万円かかったが、調理以外の水を井戸水で賄うことで水道代を節減、数年で返済できたという。笠原さんは「生活用水に困らず、地域の役にも立てた。井戸のおかげです」と話した。

(吉川喬、一色涼)



阪神大震災当時、神戸市灘区の病院で働いていた笠原洋子さん。震災を教訓に熊本で掘削した井戸が役に立ったという＝熊本市西区